

三雲ヤリミゾ附近採集の鳥形容器をめぐって

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

1. はじめに

筆者が糸島地方の弥生時代を学ぶなかで、中山平次郎の一連の研究論文には大きな刺激を受けることが多かった。論文中には多くの資料の図が掲載されたが、なかでも私の脳裏から消えない一点の土器があった。それが「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就いて（一）」（註1・以下「大正7年報告」）の第4図に掲載された「鳥形容器」（第1図（74））である。「三雲ヤリミゾ附近」で採集されたとされ、鳥を模ったとみられる丹塗磨研の土製品の下部に脚台がつく。

この報告には、同地で採集した土器として須玖式甕棺の破片（30）とともに弥生時代中期後半の壺（49）、甕（48）、高坏（14、66）、弥生時代後期の高坏（70）などが紹介されており、当該土器もこの時期に属するものとされるが、採集地点や状況などの詳細は明らかでない。弥生時代の形象製品が少ない北部九州においては異彩を放つ土器であるが、その後の研究において俎上にあがることはほとんどない幻の土器と化していた。

さて、筆者は平成28年度に開催した当館の秋季特別展「王の鏡」展の開催にあたり、出陳のお願いに九州大学考古学研究室を訪れた際、かねてから関心のあった鳥形容器について宮本一夫教授にお尋ねしたところ、ほどなくその場での実見の機会に恵まれ、あわせて当該展示会への出品についてもご快諾いただいた。奇しくもこの土器が世に知られてから100年の節目にあたり思い出深い展示となった。

展示図録（註2）のなかで資料を紹介することができたものの、紙面の制約もあって詳細まで述べるができなかった。そこで改めて本誌において観察結果とともに若干の考察も交えて報告する。

なお、資料の調査機会を与えていただきました宮本一夫先生に、感謝申し上げる次第である。

2. 資料観察

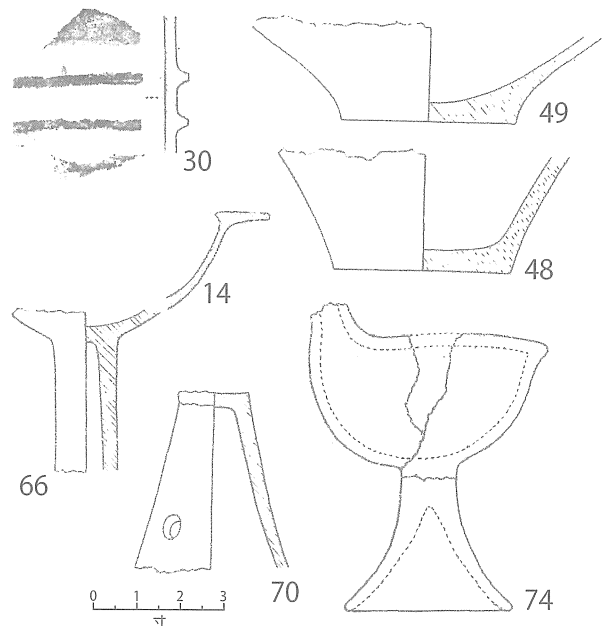
当該土製品は、内面に「三雲ヤリミゾ附近」の注記があり（第2図写真①）、まさに中山が採集した地点名と一致する。中山の報告文では、「高き足を

有せる鳥形容器の破片の如くにして、外面全部赤塗なり。図中の点線は器の厚さを示す。」と解説されている。その実測図から計測した鳥形の体長は16.6cm。器高は20cm弱で、当該資料の計測値は後述のように近似値を示しており、丹塗磨研土器であること、何より側面観の特徴的な形状から当該資料であることは疑いなく、その姿を鳥形と評した中山の見立て通りである。

胴部、脚部ともに主軸方向にほぼ垂直に半裁されて半分弱が残るものの、残存部位は胴部と脚部では180度異なり、接点はわずかで破断面の損傷痕跡が新しいので、おそらく掘り出された際の破損と考えられる。偶然とはいえ、断面観察や原形を推定するうえでは過不足のないぎりぎりの残存状態であったといえる。

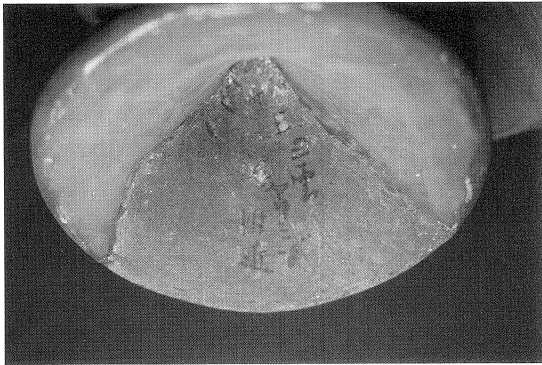
中山の図にも示されているように胴部の中央側面に逆三角形の欠損部があり、石膏による充填復元が行われている。胴部から脚台部にかけての外形は概ね図上で復元することができた（第2図）。現状値で全長18.4cm、幅12.5cm、高さ18.7cmとなる。

頸部は根元から折れているが、本来は斜め前方に

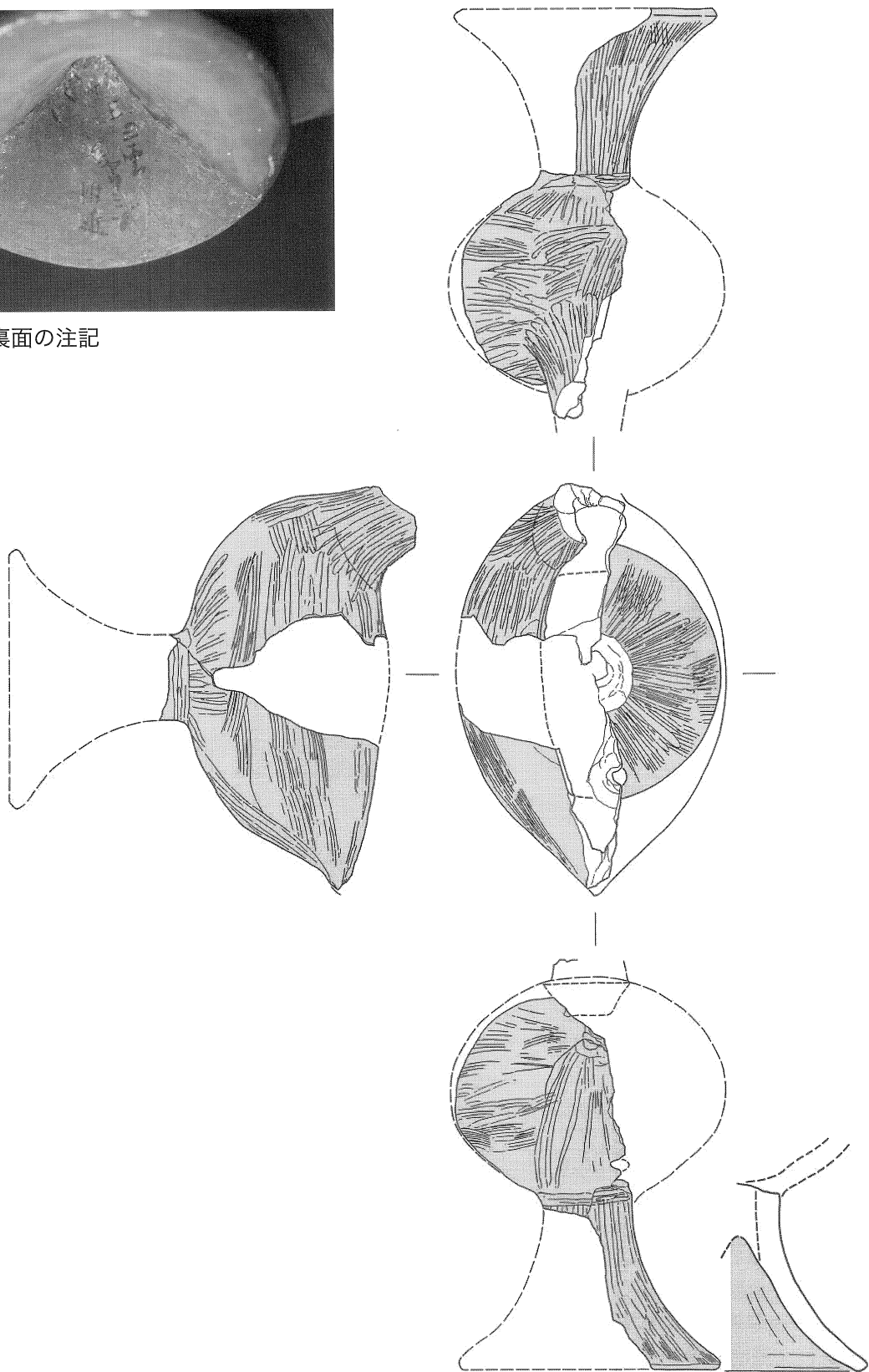


第1図 三雲ヤリミゾ附近採集土器

（註1文献図より抜粋。数字は文献挿入図中の土器番号）



①脚台部裏面の注記



第2図 鳥形容器実測図および細部写真(実測図は1/3 写真倍率は任意)

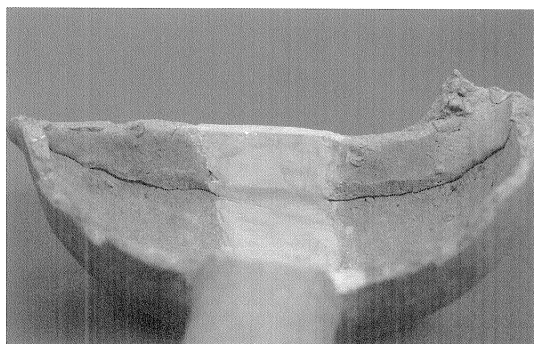
向かって延びていたと推定され、中空で器壁の厚さは5～8mmを測る。内面にはナデによる成形痕跡が認められるものの表面に凹凸が残るなど、さほど丁寧に行われたものではないようである。

胴体は横断面が円形に近くふっくらとした印象である。表面には羽などの付帯表現は認められない。尻尾は短く先端に向って尖りぎみにおさめる。

胴下部と脚台部の境は丁寧に接合されている。筒

状の脚柱部の中位から裾にラッパ状に広がり、裾の径は12cmほどで端部断面は丸く仕上げる。

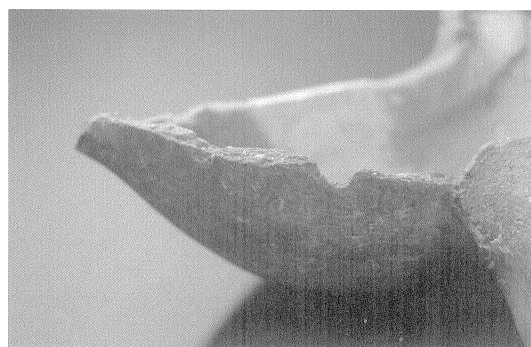
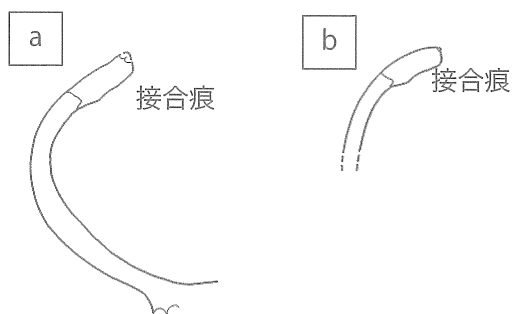
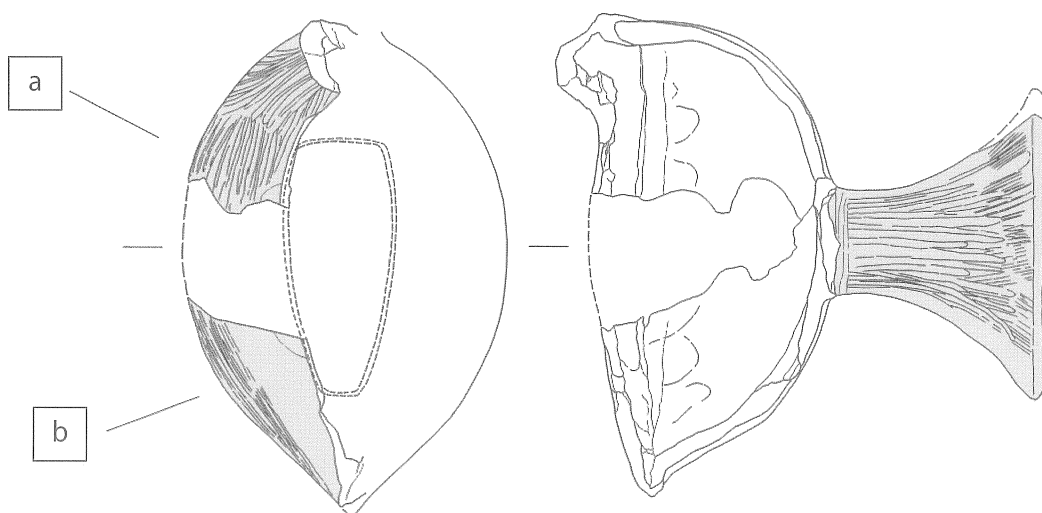
成形にあたっては、胴体は底部から側面にかけて楕円形の鉢状につくり、これに別づくりの背部を載せて接合している。外面は全面に丹塗り磨研が施されているが、内面はナデや指の押圧調整にとどまり、胴体と背部の接合に当たっては、中ほどまではヘラ状の工具を押し当てるナデ調整が行われる(第2図



②背面の接合痕



③頸部付近の接合痕跡拡大



④尾部下の穿孔痕跡



写真②)が、奥までは及んでいない。これは、背面中央に最大幅4.5cmほどの中央が膨らみぎみの長台形の口を開け、そこから工具の届く範囲にナデ調整が施されたことによるとみられる。

なお、この長台形の口からは、上に立ち上がる口頸部が付設された痕跡は認められない。

表面は全面に丹塗りが行われており、脚台部では裏側にまで塗られているところが極めて稀である。胴部には横方向、頸部と脚台部には縦方向の丁寧な研磨が施されるなど、精度の高い丹塗磨研土器として仕上げられている。

尻部下方には外部から内部に向けて径5mmほどの焼成後穿孔（第1図③）の痕跡が確認された。当該地で多くみられる丹塗磨研土器などに施される穿孔痕と同様である。

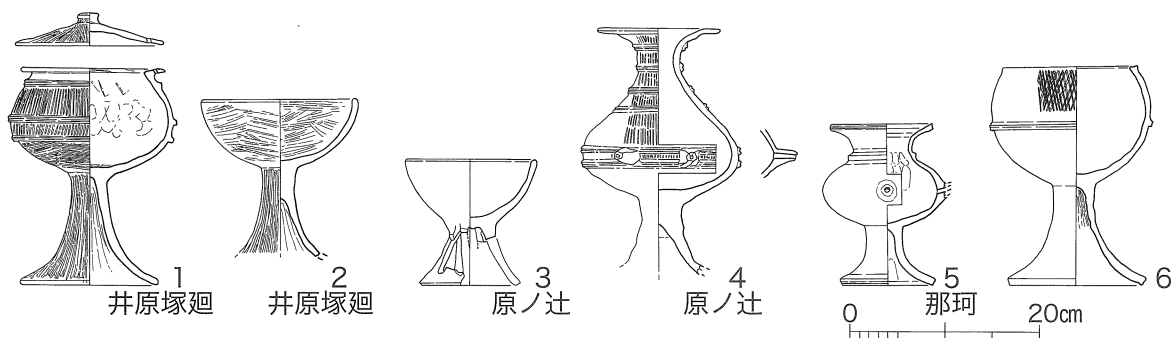
これらの様相から、当該土器が何らかの祭祀に使用されていた可能性が極めて高いと考えられ、その具体的な用途については気にかかるところである。

当該土器の欠失している頭頸部の形状については、近隣では類似する製品は確認できないので、地域は異なるものの弥生時代の鳥型土器として知られる八日市地方遺跡（石川県・弥生中期）や朝日遺跡（愛知県）の同種資料を参考にして検討すると、三雲例は頸部が細く上方に向かってさらに窄まっていることから、通常の土器の口縁のような注ぎ口は成形されていなかったと考えられ、鳥の頭部が模られた可能性が高い。想像逞しくすれば、嘴部付近に注口を設けた酒器として使用されたものであろうか。

どのような鳥を模したかといえ、尻尾が短く少し横広に成形された様子から、鶏とは考えにくく、鴨のような水鳥がイメージしやすい。

3. 考察

(1) 丹塗磨研土器としての鳥形容器



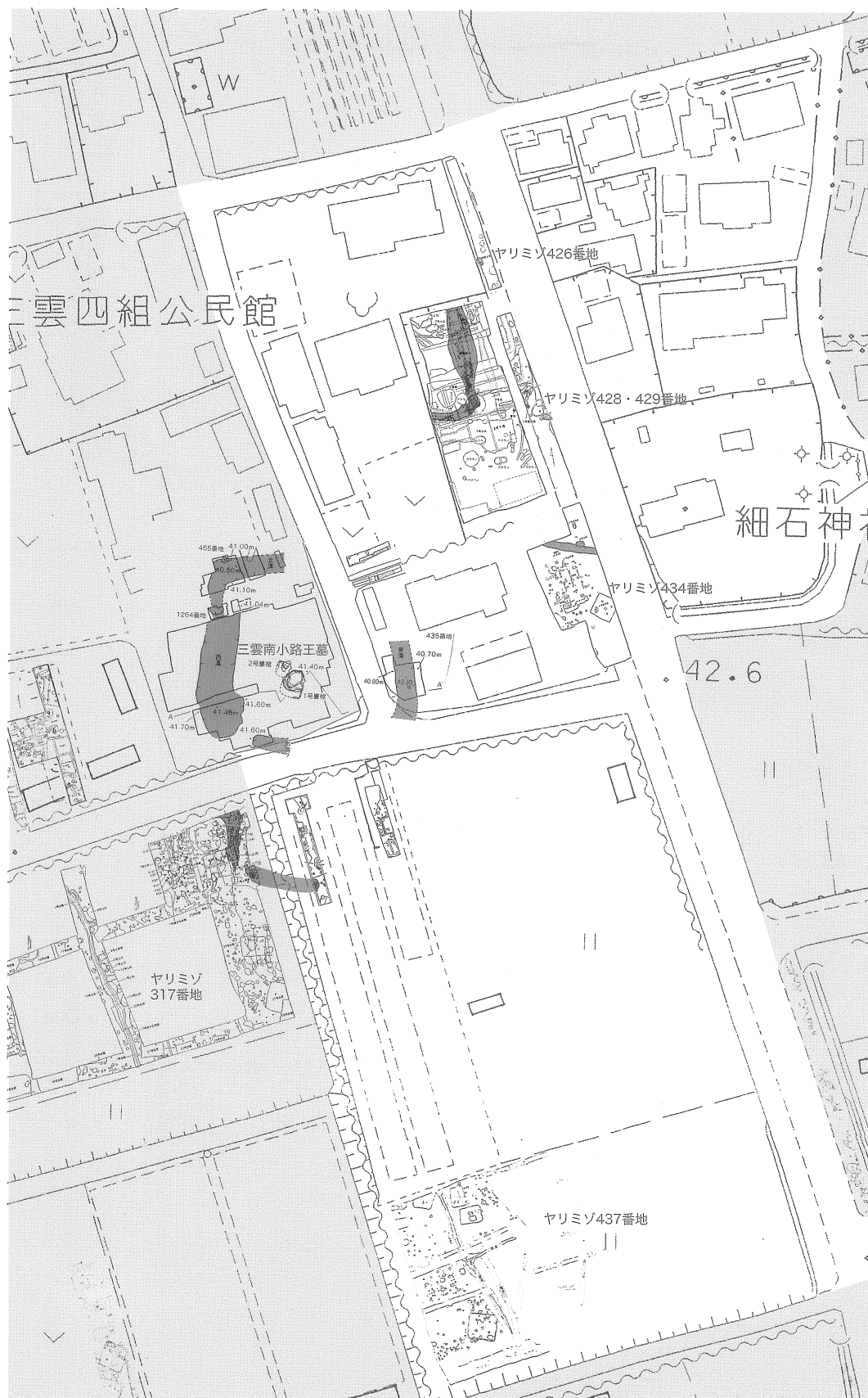
第3図 須玖式期の脚台を付した丹塗磨研土器例

当該土器は表面全体に丹塗磨研が施されており、器の下部に穿孔が施されていることから、何らかの祭祀に用いられたものと推定される。北部九州では、弥生時代中期後半を中心に丹塗磨研土器が井戸、河川水源、葬送など様々な場面で行われた祭祀において用いられたことが知られる。このうち、広口壺、袋状口縁壺、高坏、短頸壺など糸島地方を中心に分布するものは、特に『糸島型祭祀用土器』と称され、糸島地方を中心とした祭祀の共有圏域を示す政治性を帯びた器物としてその重要性が指摘されている（註3）。なかでも脚台が付された広口壺、短頸壺、鉢（第3図）は、精製度も高く個体数も極めて少ない。一例をあげれば脚台付広口壺（第3図4：5）には双口を付されたものがあり、三雲・井原遺跡、元岡・桑原遺跡、吉武遺跡群、比恵・那珂遺跡、原の辻遺跡など各地の拠点集落に限定的に出土している（註4）。特殊な形状を有する鳥形容器もこれらと同じような性格を有していた可能性を指摘できる。

(2) 弥生時代の鳥形

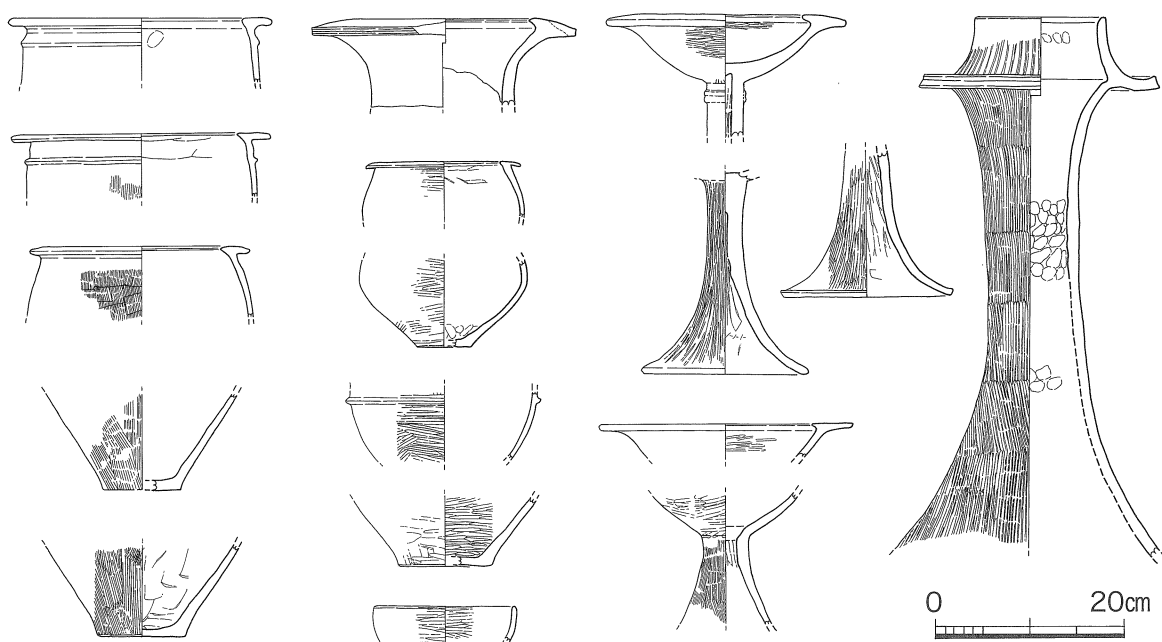
そもそも、鳥形を呈する造形品は縄文時代にはほとんど見られず、弥生時代に出現し鳥類を尊ぶ思想が稲作農耕文化とともに大陸から伝来したことを契機とし、穀霊として主に農耕儀礼で用いられたと考えられてきた（註5）。しかし、鳥霊思想の根幹には「靈魂が鳥に乗り、あるいは鳥形をして他界に飛翔する」とする指摘があり、これに基づき、出生、葬送の儀礼においても鳥はその役割を果たしたとする見解（註6）も示されている。

弥生時代の鳥形製品としては木製と土製のものが知られる。形状は板状や立体的であったりと多様で、その分布は中国地方東部から東海地方にかけて集中し、九州地方では少ないとされてきた（註7）。

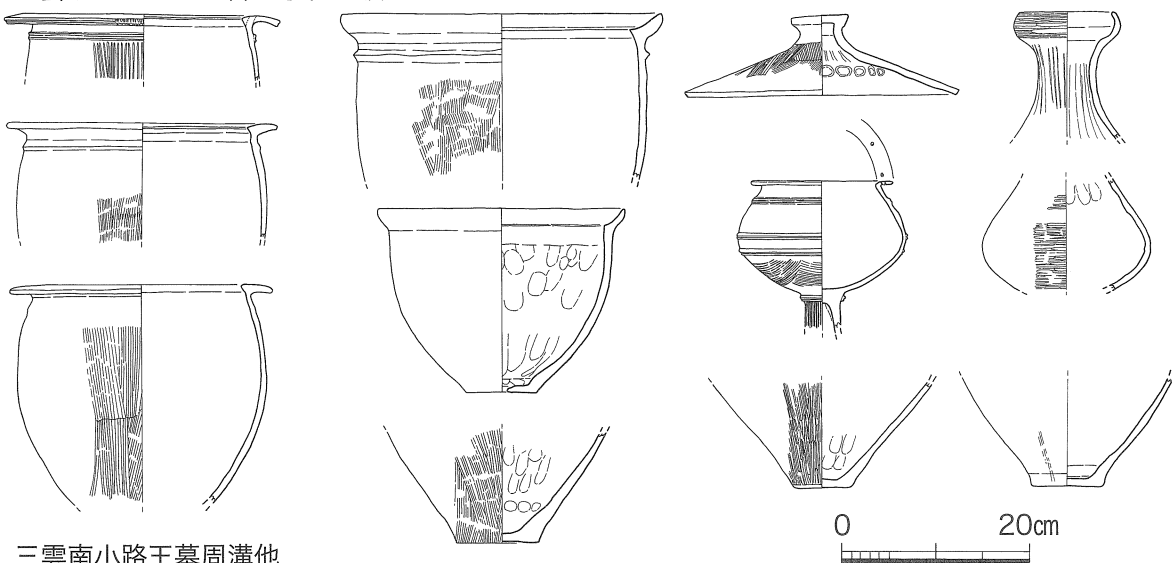


第4図 三雲・井原遺跡三雲ヤリミゾ地区（白抜き範囲）周辺の現状と主な発掘調査地点(1/1200)

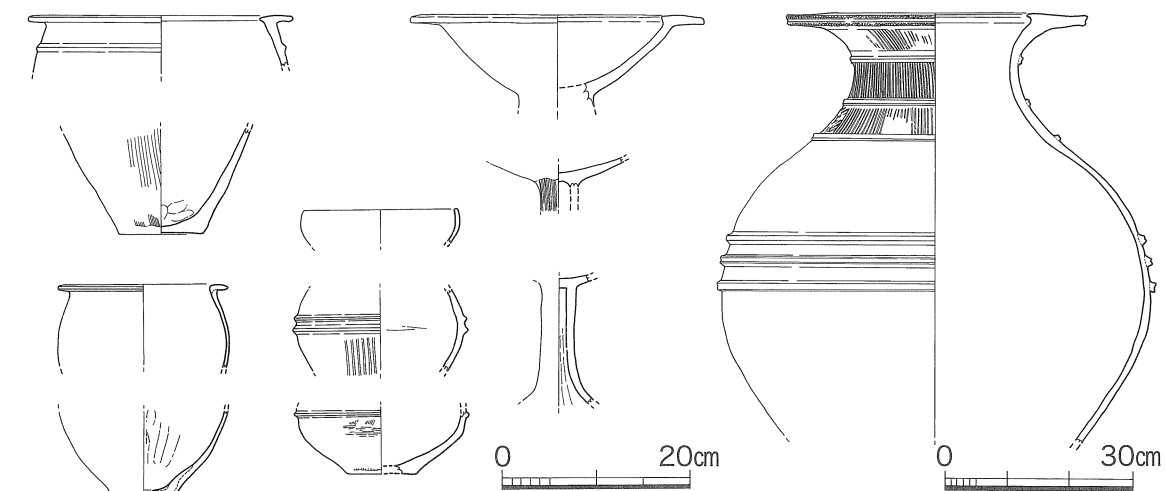
三雲ヤリミゾ428, 429番地祭祀溝



三雲ヤリミゾ426番地祭祀土壇



三雲南小路王墓周溝他



第5図 三雲ヤリミゾ428, 429番地祭祀土壇(上段)、426番地祭祀土壇(中段)、
三雲南小路王墓周溝他(下段) 出土土器実測図(1/8)

しかし、近年は上籾子遺跡（糸島市）や元岡・桑原遺跡（福岡市）で木製鳥形の出土が報告され（註8）、玄海灘沿岸地域での出土事例も増加している。本来、稲作とともに大陸から伝播したとすれば当然の現象ともいえるが、素材や用途の違いが出土遺構、引いては出土数に影響してきた可能性もあり、今後とも注意を要する。

鳥形容器に特化した研究では、近年の白石哲也の論考（註9）が注目される。全国の弥生～古墳時代前期の76例を集成・分析したなかで、類型ごとの使用傾向を指摘するとともに、葬送儀礼での使用実例として亀井遺跡（大阪府）の方形周溝墓出土例を上げ、その初現が弥生時代中期まで遡ることを指摘した。このことは、今回紹介している鳥型容器の用途を考える上でも重要である。

（3） 採集地から想定される鳥形容器の用途

鳥形容器の採集された「三雲ヤリミゾ附近」について、地名からまず頭に思い浮かぶのは江戸時代天明年間に発見された井原鎚溝（ヤリミゾ）遺跡で小字が共通する。実は「ヤリミゾ」は井原地区と三雲地区にまたがる小字で、時期は定かでないが、分村によって「ヤリミゾ」が両村に分かれたと考えられ三雲・井原遺跡における王墓が集中する王墓域の一角に位置する。

大正4年の地積図によれば当時の「三雲字ヤリミゾ」の範囲は第4図の通りである。現在の細石神社を含めその西側周縁の部～南の一带を含むおよそ東西100m、南北200mの範囲となる。

「大正7年報告」の冒頭には「怡土村三雲ヤリミゾ附近」と書かれているのみであるが、後段には、

「川端以南三雲民居附近に互る地域は耕地より土器破片の多数を出したところにして、文政中鉾剣鏡及玉類を伴出したる大甕を発掘せる細石神社とも隣接し、此界限一帯の田圃には素焼土器の他に往々斎瓦陶器破片及黒曜石片を散見す。（中略） 鎚溝附近より採集したる破片類は其数少なからずして（後略）」

と記されている。細石神社を起点とした「此界限一帯の田圃」が遺物採集ポイントの一つであったことがうかがえる。

「文政中」に発見された遺構とは、三雲南小路王墓1号甕棺墓のことで、中山は、大正6年頃からたびたびこの界限での聞き取りや遺物の採集を行っている。この聞き取り調査によって地元民からも長ら

く忘れ去られていた伊都国王墓の位置の特定にいたった（註10）のであるが、このことが判明したのは大正12年頃のこと、それ以前は遺跡の位置を特定できないまま調査や資料採集が続いていたことが、「大正7年報告」中に記されている。

このため、すでに中山が小字名として認知していた「ヤリミゾ」地区を中心にその周辺一帯で採集されたものを含めて紹介されたと考えられ、これを裏付けるように、「大正7年報告」には南小路地区の西部で採集した打製石斧もヤリミゾ附近出土資料として報告されている。つまり、三雲南小路王墓周辺も採集地に含まれていたことは留意しておく必要がある。

三雲・井原遺跡におけるヤリミゾ地区の位置関係について整理しておこう。伊都国の拠点集落である三雲・井原遺跡は、南北1200m、東西700mに及ぶ広大な集落遺跡であるが、ヤリミゾ地区は主要な集落空間と考えられる番上、仲田、イフ地区の南西部に位置し、西には伊都国王墓の一つである三雲南小路王墓が隣接する。三雲南小路王墓から北に延びる微高地の先端には王の居館とも目される下西環濠遺構も立地しており、この微高地と主要集落空間との間には浅い谷が南北に分断するように横たわる。現在は平坦に見える地形も弥生時代の地形環境は複雑である（註11）。

現在、三雲ヤリミゾ地区では、その中央を県道が通り、平成16年度にこの拡幅工事に先立ち発掘調査が行われた。また、これと前後して井原鎚溝王墓の所在地を確認するための調査も実施された。

これら一連の調査において、鳥形容器と同時期の弥生時代中期後半～後期初頭の遺構、遺物の検出が顕著であったのは以下の地点であった。

ヤリミゾ426番地

弥生中期後半の祭祀土壇が検出され、丹塗磨研土器を含む甕、蓋、鉢、袋状口縁壺、脚付短頸壺などが出土した（第5図上段）。

ヤリミゾ428、429番地

成人用甕棺1基、小児用甕棺2基、北から延びる幅3～5m、深さ30～40cmの溝は、中途から西に屈曲する。埋土から丹塗磨研土器とともに大型の筒形器台（第5図中段）、完形の袋状鉄斧も出土し、葬送に関連する遺構で、方形区画墓（墳丘墓）の周溝である可能性がある（註12）。

ヤリミゾ434番地

429番地の南に隣接する調査地点で、その北東

端から弥生時代中期末の小児用甕棺墓と祭祀土壇を検出した。このさらに南で検出された東西溝には墓域の区画溝であった可能性がある。

上覚439番地

三雲南小路王墓の南側に市道を挟み隣接する水田が調査地点であった。二条の溝を検出し、両溝とも埋土から弥生中期中葉～後期の土器が出土したが、中期の土器には丹塗磨研土器の壺、甕が含まれていた。2号溝からは完形の鉄鉾も出土している。1号溝はL字の屈曲部を有することから、方形区画墓（墳丘墓）の周溝の一部である可能性を有す（註13）。

三雲南小路王墓については、既往の調査報告によって、一辺33m前後の方形の墓域（墳丘）の周囲に周溝をめぐるした弥生時代中期末の伊都国王墓であることが明らかとなっており、周溝からは弥生時代後期～古墳時代前期にかけての多量の土器が出土している。しかし、築造時のものと考えられる土器の出土量は少なく、また、小片ばかりで、これまでのところ残存状態が良好な土器の出土は極めて少ない（第5図下段）ことから、王墓の築造以後、周溝の溝さらいなどの維持作業とともに長期にわたる追善的な祭祀が行われていた可能性がある。

以上、一連の調査の成果から、ヤリミゾ地区周辺一帯では弥生時代中期後半～末の丹塗磨研土器を伴う祭祀溝が確認され、これらの溝の機能について、特に429、439番地で検出したL字状に屈曲する溝は方形区画墓の周溝の一部である可能性が高く、完形の鉄製武器や工具、糸島地方では少ない精製大型器台の出土は、これら祭祀を主催した集団の社会階層の高さもうかがわせる。

一方、住居跡など当該期の生活遺構は認められず、この一帯が伊都国有力層の墓群やこれにともなう祭祀空間であった可能性が高い。

また、西に隣接する南小路地区では、弥生時代中期末の伊都国王墓である三雲南小路王墓が所在し、王墓域の一角を占めることも明らかとなった。

4 おわりに

三雲ヤリミゾ附近で採集された鳥形容器について、その性格と意義を探るために、詳細な遺物観察、また、中山の採取活動の足跡をたどり採集地の絞り込みを試みるとともに、周辺での既往の調査結果を概観した。

その結果、当該土器が弥生時代中期後半～末に属し、裏面まで赤彩が施された脚台を付す特殊な丹塗

磨研土器であることを指摘した。

また、採集地点とされる三雲ヤリミゾ附近は、現在のヤリミゾ・南小路地区を中心とする一帯にあたる可能性が高く、この地区の近年の調査成果から、一帯が弥生時代中期後半～末にかけて三雲南小路王墓を頂点とする墳墓群を構成し、他にも区画墓（墳丘墓）が存在する可能性を有するエリアであることも確認できた。

当該鳥形容器が、王墓や墳丘墓に伴って出土したとすれば、まさにこれらの葬送儀礼に伴う祭祀土器であった可能性が高く、白石が指摘したように鳥形容器の用途の多様化を示す新たな資料ともなる。

土器の出土地点については、現在確認された部位は資料全体の半分程度にとどまっており、この残片が将来の発掘調査で新たに発見され、出土地が特定される可能性もある。このことから三雲・井原遺跡では、後世の攪乱であっても細心の注意を払いながら取り組む必要があることを記して結びとしたい。

本稿の執筆にあたり、菅波正人、常松幹夫氏にご教示を賜った。末尾ではあるが記して感謝の意を表したい。

【註】

1. 中山平次郎1917「九州北部に於ける先史原両時代中間期間の遺物に就いて」『考古学雑誌』7-10
2. 岡部裕俊2016「伊都国王墓にまつわる祭祀」『王の鏡～平原王墓とその時代～』伊都国歴史博物館
3. 石橋新次1992「糸島型祭祀用土器の成立とその意義」『北部九州の古代史』有明文化を考える会
4. 常松幹雄氏よりご教示
5. 平林章仁2011「鳥霊信仰と養葬一」126頁『鹿と鳥の文化史』
6. 註5におなじ
7. 白石哲也2016「弥生時代における鳥形土製品の役割」129-130頁『古代』早稲田大学考古学会
8. 前原市教育委員会1996『上籬子遺跡―見えてきた伊都国人のくらし―』福岡市教育委員会2012『元岡・桑原遺跡第42・52次調査』
9. 註7文献に同じ
10. 中山平次郎1923「三雲南小路における特殊埋蔵物出土地点」『考古学雑誌』13-9
11. 角浩行2006「三雲・井原弥生集落の成立と変遷」『伊都国歴史博物館紀要創刊号』
12. 平尾和久2010「三雲ヤリミゾ地区429-1番地（第5・6地点）」三雲・井原遺跡VI 糸島市教育委員会
13. 江崎靖隆「上覚地区439番地1,2号溝について」『三雲・井原遺跡IX』2014 糸島市教育委員会